

西照

西照寺寺報「さいしょう」 第40号

2020年1月6日

発行 浄土真宗本願寺派 西照寺
高岡市吉久2丁目4-40

郵便振替口座 00780-8-8185 西照寺
西照寺ホームページ <http://nisitera.eek.jp>

御正忌報恩講 勤修

左記のとおり御正忌の報恩講お勤めいたします
お参りくださいませ

おとめの時間

一月十六日(木) 午後二時〜

※御正忌は一座のみです。法要時の「しそおにぎり」は、昨年で終了しました。

法話 住職

西谷山西照寺



悲しみと向き合う

人生において、近しい人を亡くすことはつらく悲しいことです。このような人に、釈尊はどのような説法をされたのでしょうか。二つ話を紹介したいと思います。

キサーゴータミー

キサーゴータミーという母親がいました。ようやくよちよち歩きができるようになったかわいい盛りの息子が、突然亡くなってしまったのである。彼女は悲しみに打ちひしがれ、気も狂わんばかりに泣き叫んだ。そして、親族の制止も聞かず、子どもを抱えたまま町のなかへ飛び出していきました。

「この子供を生き返らせる薬はありませんか。ご存知の方はありませんか」

町中を冷たくなった息子を抱えながら、うろろうと訪ねまわっています。

それを見かねた人が、お釈迦さまならその薬を知っていると、声をかけました。

それを聞いて訪ねに来た彼女に、釈尊は

「そうです。確かに、私はその薬を知っています」

「白いケシの実をひとつまみもらってきてください」

「それなら、私にもできそうです」

「ただし、キサーゴータミーよ。今まで死者を出したことの無い家から貫ってきてください。死者を出したことの無い家からですよ」

「はい、わかりました。お釈迦さま」

そういって、町に戻って一軒一軒訪ね歩きました。ところが、町中のどの家を探しても死者を出したことの無い家はありませんでした。

「ああ、なんと恐ろしいことか」

今まで自分の子だけが死んだと思っていたが、町中を歩いてみると生きている者よりも死者の方がずっと多い。死はどの家にもあると気づかされてきました。

夕刻になり、少し冷静になったゴータミーは、森に入り子供を手厚く葬ってから釈尊のもとへ再び訪ねます。

「どうでしたか、白いケシの実は手に入りましたか」

「いいえ、ダメでした。お釈迦さま、生きている者よりはるかに死の方が多くことがわかりました」

「そうです。生きている者は必ず死にます。これは永遠に変わることもない法則である。(そのことを見ようとせず) 家族への妄愛や財産へのとらわれに執着している人を、死王は苦しみの底へとさらって

いくのである」と釈尊はさとされます。

そうして、ゴータミーは釈尊の弟子となり、自らの執着から解放された不死のやすらぎの境地をひらいた、と伝えられています。(ダンマパダアツカター八・三(要約))

ウツピリー 尼

ウツピリーという母親がいました。ジーヴァーという娘を亡くし、我が子の名を呼び、泣き叫んでいます。そこを通りかかったお釈迦さまが、

「あなたは、ジーヴァー、ジーヴァーと言って号泣しているが、どのジーヴァーを悼むのか。この火葬場では八万四千人のジーヴァーという娘が焼かれたのである」

その時、彼女はハッと気がつきます。

「あなたは、私の心臓に突き刺さっていた見難い矢を抜いてくださいました。悲しみの妄執に打ち負かされていた私のために、その悲しみを取り除いてくださいました。お釈迦さま(仏)と、真理の教え(法)と、修行者の集い(僧)に帰依します」といって、仏弟子(尼僧)となつていきます。

(デーリーガーター 第五二偈(要約))



いのちの事実への気づき

このように釈尊は、悲しみに嘆く人に、自らのいのちの事実(無常)に徹底的に気づかせることによって、悲苦からの解放を説かれていきました。

この「いのちの事実」ということについて、修行道地経にヒントになるような話がかかれていきます。

子どもたちが、川辺の砂浜で城やら、家やら、動物やら、いろんなものを作って楽しそうに遊んでいました。すると、一人の子供が砂の城を壊してしまいました。作った子供は、「俺の城が……。俺の城が……。何てことしてくれる」と泣き叫びます。周りの子供も壊した子を責め立てます。壊した子供は「ゴメン、ゴメン」と泣きながら復元しようとしませんがうまくいきません。

そんなことをしているうちにやがて夕暮れになって、みんな忘れかのように家へ帰っていきます。残された砂の造形物は、波に流されて元の砂浜に戻っていきました。

というような話です。

これは私たちの命というものをあらわしているように思います。この話のように子供が作ったというならまだしもですが、私たちの場合は、一方的に与えられた命です。私が作ったものでもありませんし、

(裏面に続く)

(中面からの続き)

私のものでもありません。それこそ宇宙が一つであるような、無限大のような砂浜の中で、いろんなものが仮に集まって、ある時は人間、豚、花などと形作られてきます。単なる砂の造形物にしかすぎません。作られたものが生滅変化を繰り返すのは不変の道理(無常)です。

人間の場合は、途中からこれは私の命で私のものであるという、自我の幻想が生まれます。そこで自分の思い通りにしたいという我執煩惱に縛られる。ですが、私の与えられているいのちの事實は、違う法則で動いています。自分の思い通りにはなりませんから、思い通りにならないことが、苦しみや悲しみとなって現れてきます。

実は、この苦しみや悲しみには重大な意味とメッセージが込められていると釈尊は気づきました。本来の私のいのちの事實から、我執煩惱に縛られている幻想を私だと思っているが、本当の自分はいのちの事實のなかにある。それに気づけというメッセージです。

宇宙が一つであるような砂浜で、人間という形になったり、豚になったり、花になったり……。人間として生まれても、若い時や健康の時もあります。年老いて、病気になるって、死んでいきます。これらの形の変化は、砂の造形物の変化であって、どれも良いとか悪いとかはありません。どのような形であろうと百点満点です。しかし、このいのちを我

執煩惱でしか見れない私は、この形は良くて、この形は悪い。こんな形は幸福で、こんな形になったら不幸のどん底、苦しくて悲しいと執着しています。

その執着から解放されると、わたしのいのちの事實のなかに本当の私があるということです。

いのちというのは、相互に依存し相互に支え合い、関係し合いながら一つのいのちを生きています。宇宙が一つであるような砂浜のいのちです。そのことを仏教では「如(にょ)一如」という言葉で表現しています。親鸞様は『一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり』(歎異抄第五条)と云われています。みんな砂浜のようにどこかでつながっている親兄弟のような関係であるのだから、すべての人を自分のことのように大事に生きよう。相手の幸せが自分の幸せになる。慈悲に生きよう。その慈悲の心こそ私のいのちの事實に宿った願いである。そのことに気づけと釈尊は教えてくださったように思います。

ところが、頭のなかでは何となく理解できても、全く自我煩惱から解放されることの無い私があります。その私のために「如」から、形となり御名となって導き救うはたらきとして現れてくださった方が阿弥陀如来でありました。合掌

(文責 住職)